HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マルクスにおける科学と哲学
Author(s)	花崎, 皋平
Citation	北海道大學文學部紀要, 16(2), 1-33
Issue Date	1968-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33325
Type	departmental bulletin paper
File Information	16(2)_PR1-33.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

マルクスにおける科学と哲学

花崎皋平

マルクスにおける科学と哲学

花崎皋平

目次

一、分析視角
（1）つまずきの石としてのヘーゲル主義
（2）リカードーの哲学的意義をめぐって
二、現実性、諸個人、歴史
三、方法の問題
—「経済学批判序説」を中心に—

北大文学部紀要

はじめに

わたくしは、最近、「資本論」を基軸としてマルクス主義哲学を再検討するという方針で、序論風の論文を書いた。[1]この論文は、その序論からの若干の展開であり、今後書きつぐ予定の論稿の一部である。

一、分析視角

マルクス主義の三つの源泉として、ふつう指摘されるものは、ヘーゲルに代表されるドイツ古典哲学、スミス、リカードーに代表されるイギリス古典経済学、ルソーからサン・シモンにいたるフランス社会主義思想である。このうち、第三の社会主義思想との関連は、マルクスの歴史観の構想をみるうえで重要であるが、いま問題としようとしているマルクスの認識論の構造と方法の問題にとっては、直接ふれるものでない。したがって、ここでは、ヘーゲルとリカードーへの関係の問題に、焦点をおきたい。

「ある意味では、実践の哲学はヘーゲル・プラス・リカードーに等しいと言うことができる、とわたしには思われる」[2]といったのは、アントニオ・グラムシであった。こうした把握への批判が、この節の目的である。

(1) つまずきの石としてのヘーゲル主義

マルクスの思想形成の過程におけるヘーゲル哲学の影響については、いまさらいうまでもない。また、エンゲルスやレーニンが、ヘーゲル論理学にあたえた高い評価もよく知られたところである。そうした両者の連関を承知したう

えで、わたくしが強調したいのは、ヘーゲルの概念、体系、方法などを、マルクス理解の基礎とする立場への批判的な視角である、従来の教条主義的なマルクス主義理解や初期マルクス＝マルクスの哲学、というみかたの限界は、この点にあると思われる。すなわち、マルクス主義の「弁証法」のカテゴリーとしてとらえだされるものは、ほとんどすべて、ヘーゲル論理学の「有」および「本質」の部分のカテゴリーであり、叙述の順序および副次的カテゴリーに若干の工夫がなされているにすぎない。それは修正ヘーゲル主義とでもよべそうな構造をもっている。わたくしは、思想の歴史的発展のうえでの、用語の継承性を一般的に非難しようというのではない。用語の継承性の背後でおこっている意味と意味づけの脈絡そのものの変化が、正確に規定されねばならない、ということをいいたいのである。用語の継承性と意味および意味づけの脈絡の転化との関係を認識するために、方法的にどういう配慮が必要であろうか。そのために必要なことは、このふたつの体系を、構造・編成のことなったふたつの全体としてとらえること、フランスのルイ・アルチュセールのこのんでもちいる用語では、「認識論的切断」をおこなうことであろう。(3)

これにたいして、ヘーゲルとマルクスとの直線的な並列関係、または「転倒」という概念の通俗的理解がそうであるように、「ヘーゲル哲学の合理的核心」が、そのままマルクスの哲学の筋骨となっているとする移行関係が、しばしば想定される。たとえば、ヘーゲルが展開した「矛盾」の概念が、マルクスの場合、どのように具体化されているかとか、どのように適用されているか、といったとらえかたや、ヘーゲルの場合の「本質」概念は、精神的なものという内容を基礎としているが、マルクスの場合は、物質的なものに転倒され、しかも自己運動という内容は保持されている、といったような単純な対比などが、しばしばおこなわれている。

それは、マルクスの哲学が、かれの中心的業績である経済学批判の体系の概念的編成のうちにもとめられるのでな

く、近世的な枠内で哲学問題とされるものについてのべている断章や小論文のうちにだけ、さがしもとめられるような傾向と内的にむすびついている。

わたくしの基本的視角は、マルクスの論理と思想とを、ヘーゲルの眼鏡をかけてではなく、マルクス自身の提起し、使用している諸概念とその体系的編成においてとらえることにある。このように、マルクスからさかのぼってヘーゲルとの関係をてらすかたちで、はじめて、用語の連続性の背後での、思想の地平・次元の相違が認識可能となるであろう。わたくしに、このような視座の確定をうながしたものとして、最近のマルクス手稿の整理研究の進展がある。すなわち、一八五〇年代の経済学研究ノートの出版――『経済学批判要綱』(Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Rohentwurf, 1857-1858, Anhang 1850-1859)――や、『ドイツ・イデオロギー』第一章の再編集などがおこなわれて、このような視点からの研究をすすめるためのあたらしい可能性がひらけてきている。後者については、翻訳と若干の問題点の指摘をすでにおこなったので[4]、つぎの段階として、ここでは主として前者、『経済学批判要綱』の検討へとすすみたいと考えている。しかし、それにさきだって、問題とするところをより鮮明に浮彫りにするために、ヘーゲル主義がなぜつまずきの石となっているのか、という状況の分析に若干たち入ることにしよう。

ヘーゲル哲学は、カント、フィヒテらの主観的観念論にたいして、客観的観念論とよばれる。すなわち、主観と客観の対立を、客観的契機によって包摂し、その客観的統一の背後に絶対精神の運動をみるものである。そして、その絶対精神の運動を、思考が自己自身の運動として展開したもの、それが論理＝弁証法であった。このような構造をもつヘーゲル哲学が、ヘーゲル主義としてマルクス主義へはいりこむ場合、ふたつの傾向がみられる。ひとつは、一

九三〇年のソヴェト哲学界における機械論的修正主義やメンシェヴィキ的傾向の観念論とよばれたものである。その代表者は、ブハーリンとデボーリンであり、かれらは、ヘーゲルの弁証法をそのまま普遍的図式として、マルクス主義の弁証法と等置し、「純粋な」方法論として位置づけるものであった。「一般的な方法論としての弁証法は、あらゆる具体的な経験科学をつらぬくべきである。なぜなら、それは、具体的な内容に内的な連関をもちこむ、いわば科学の代数学だからである」[5]（デボーリン）。あるいはまた、弁証法的方法は「ヘーゲルの弁証法的方法と、自然、ならびに社会にかんする唯物論的な理解との綜合である」[6]（デボーリン）という。この場合には、ヘーゲルが主観と客観との統一を、客観的諸契機のもとでとらえ、カテゴリーの体系に仕上げていることを、そのままヘーゲルの「合理的核心」とみて、端緒の「純粋有」から帰結の「絶対理念」への完結した体系を、「物質の自己運動」からはじめて、「理論と実践の統一」へいたる体系へ平行移動させるのである。このようなヘーゲル主義は、内容上は、客観的観念論の体系を前提とし、その問題性の枠内でマルクス主義の哲学をとらえるものといえよう。

これにたいして、ヘーゲルが実体を主体に転換し、主客の統一を運動過程性においてとらえたという近世哲学の終点としての意義を中心に、その統一が絶対精神による点を批判しながらも、世界を有機的総体性としてとらえ、それを表出する概念を探求している点をたかく評価するとともに、この統一者を現実的な主体にかえようとする歴史主義－人間主義的な傾向でのヘーゲル主義がある。このこころみの代表的なものは、ルカーチの『歴史と階級意識』（一九二三）であろう。この傾向は、ヘーゲルの意義およびその限界の把握において、前者の無批判的ヘーゲル主義よりもすすんだものであり、そのためにマルクス主義を現代の思想として位置づけようとするさいにくりかえしてとりあげられ、最近の初期マルクスの流行とともに、あらためてたかい評価をあたえられているものである。

前者の客観主義的ヘーゲル主義への批判は、すでに歴史的に完了しており、それの論争相手としてのミーチンらのおなじく教条主義的傾向への批判も次第にすすめられている段階であるので、これ以上たち入る必要はあるまい。しかし後者、ルカーチ的ヘーゲル主義にかんしては、後述のグラムシとの関連もあり、なお検討しておく必要がある。『歴史と階級意識』のなかの論文「マルクス主義者ローザ・ルクセンブルク」に、つぎの一節がある。

「歴史の説明にさいして経済的動因が主たる支配権をもつという点が、マルクス主義をブルジョア科学から決定的に区別するのではなくて、総体性（Totalität）の視点の有無こそがその区別をなすものである。総体性のカテゴリーが、すなわち全体が部分にたいして全面的、規定的に支配するということが、マルクスがヘーゲルからとってきて、まったくあたらしい科学の基礎として根本的に改作した方法の本質である。(7)」

この視点はきわめてすぐれたものであり、マルクス主義における哲学と科学とのあたらしい関係についての洞察をふくんでいるといえる。ルカーチはさらに、プロレタリア的科学の根底からの革命性を、その革命的内容にばかりでなく、むしろすぐれて「その方法そのものの革命的本質(8)」にもとめてゆく。かれは「総体性のカテゴリーの支配こそが、科学における革命的原理のにないてなのである(9)」という。だが、ルカーチがマルクス主義の方法の革命性を問題としたということには賛成できても、そこにただしい解決が準備されていたとみなすことはできない。かれが「総体性」という点にマルクス主義的方法の本質をみた、ということは、あくまでもヘーゲル弁証法へ顔を向けて、あとずさりにマルクスへちかづくヘーゲル主義を意味していた。事実、すぐつづけてかれはこうのべている。「ヘーゲル弁証法のこうした革命的原理は――ヘーゲルのすべての保守的な内容にもかかわらず――マルクス以前にいくどか認識されていた。たとえそうした認識から革命的科学が発展することはなかったとしても。マルクスによってはじめて、

ヘーゲル弁証法は、ゲルツェンのいう、真に『革命の代数学』となったのである。」[10]

つまり、マルクス主義の方法的原理はもっぱらヘーゲル弁証法に負うものであり、マルクス主義の方法の革命性は、マルクスに、ではなく、ヘーゲルにその根源をもつ、とされるのである。プロレタリア的科学の革命的方法は、ヘーゲル弁証法の修正、徹底と歴史科学への適用という視野のうちへおさめられることになる。

わたくしは、ルカーチが「総体性」の問題を中心にマルクスの弁証法を把握しようとしたことを、一面でたかく評価するものである。『歴史と階級意識』は、歴史的主体としてのプロレタリアートの生成の論理というかたちで、ヘーゲル弁証法の現実化がギリギリまですすめられているといってよいであろう。同時に、それはあくまでも光源をヘーゲルにおいた視野のなかのマルクス像であり、マルクス主義像であった。われわれは、この関係そのものを転換させねばならない。ヘーゲルのえがいた下図に、マルクスが色を塗ったかのような関係から、仕事場におけるマルクス自身の方法と対象の関係をとりだすことへと問題をうつさねばならない。それによってのみ、現代の哲学の出発点としてのマルクスの画期性をみいだすことができるであろう。

そのような視点からすれば、部分と全体、区別と同一（統一）という二側面からなる等質的な「総体性」のカテゴリーで、弁証法をとらえることも留保せねばならない。そうしたカテゴリーは、弁証法の論理の把握にとって重要な視角をあたえてくれるが、ヘーゲル弁証法の問題と概念体系のうちにくみこまれているものであって、それとは質的にことなる脈絡のうちであらためて限定されて、はじめて生きるものでしかないのである。そして問題は、その脈絡がなんであるか、ということなのである。

(2) リカードーの哲学的意義

さきに引いたように、アントニオ・グラムシは、実践の哲学（＝マルクス主義哲学）をヘーゲル・プラス・リカードーにひとしいものとしてとらえている。はじめに、この命題にかんしてのグラムシの問題意識を再構成してみよう。かれは、「リカードーによって経済科学に導入された新しい方法論的規準は、たんなる道具的な価値しかもたないものと（もっとわかり易くいえば、形式論理学の一章として）見なされるべきか、それとも哲学的革新の意味をもっていたのか」[11]という問いをたて、すぐつぎのようにいう。「ホモ・エコノミクス」および「一定の市場」という経済学における基本的諸概念を科学的に定義することができるようにした「傾向の法則」という形式論理学的原則の発見は、認識論的価値をももった発見ではなかったのか。それはまさに新しい「内在」、「必然性」と自由とについての新しい考え方を意味していないであろうか。わたしには、実践の哲学がおこなったのは、リカードの発見を適切に全歴史に拡大することによって、したがってそこから独自な仕方で新しい世界観を引き出すことによって、まさにその発見を普遍化するという翻訳であった、と思われる。」[12] グラムシにとって、この「内在」のふるい概念は、ヘーゲル哲学のそれであった。たとえば、「たしかに実践の哲学は、内在論的実在観（ヘーゲルの――引用者注）から発生している。しかしそれはこの実在観からいっさいの思弁的な香りをうばいとり、純粋な歴史または歴史性に、あるいは純粋な人間主義に還元したそのかぎりにおいていわれることである」[13]とか、「実践の哲学は、内在性の哲学を継続させているが、しかし実践の哲学は、その形而上学の全機構から内在性の哲学を取りのぞき、それを歴史の具体的基盤のうえにみちびいている」[14]というように、ヘーゲル哲学の改作というかたちで、マルクス主義の哲学が位置づけられ

る。そして、歴史的発展における規則性と必然性の概念が、自然科学に由来するという通念をしりぞけ、それがもともと社会科学のうちで形成されたものであることをあきらかにしようとする。そのさいの参照点がリカードーなのである。すなわち、歴史的発展における規則性、必然性の概念は、「政治経済学を地盤として、とりわけ、経済科学がデーヴィッド・リカードーから受けとった形態と方法論とのなかで生まれた諸概念を綿密に仕上げたもの」[15]だとされる。そして、その概念は、「一定の市場」という事実および概念にむすびつけられる。グラムシによれば、この「一定の市場」というのは、純粋経済学では「恣意的な抽象」、「衒学的で煩瑣な分析のための便宜的な価値をもつにすぎない」ものとされているが、批判経済学にとっては、「一定の社会形態の具体的な経済諸活動の総体であって、その活動の一様性の法則にもとづいてとりあげられている、つまり『抽象』されているのだが、この抽象は、どこまでも歴史的に規定されたもの、特定のもの」[16]なのである。さらに積極的にいえば、「生産の装置の一定の構造における社会的諸勢力の一定の関係」[17]であり、それら諸勢力の作用が「自己運動」としてあらわれることの「科学的表記法」[18]にほかならない。この決定的永続的な――その決定性、永続性は一定の政治的道徳的法律的上部構造によって保証される――諸勢力とそれの自然発生的な自己運動を抽出したのちに、「科学者は自己運動そのものを仮説として絶対化し、たんなる経済的諸事実を多少とも重要な諸結合関係――現実においては経済的事実はこの結合関係のなかで現われる――から切りはなして孤立させ、原因と結果との関係、前提と帰結との関係を確立し、こうして一定の経済社会の抽象的図式をあたえた」[19]とのべている。したがって、この「自己運動」する「一定の市場」こそ、「自然的諸事実の自己運動」[20]とおなじ抽象物であり、そのもとで規則性と必然性がもたらされることになる。グラムシは、リカードーの重要性を、このような、抽象化による法則のとらえ方にみている。リカードーのマルクス主義の形成にたいす

る関係は、経済における「価値」実体のとらえ方によって重要であるだけでなく、「哲学的」な意義、すなわち生活と歴史を思考し直観する仕方における重要でもあることになる。それは、「ある帰結を生ずる前提が『あたえられたとすれば』という方法は実践の哲学の創始者たちの哲学的経験の（知的刺戟の）出発点の一つと認められるべきである」[21]というかたちで示唆されている。

このような視点から、グラムシはつぎのように、リカードー研究の重要性を力説する。

「（1）リカードの科学的、形式的諸原理をその経験的規準という形態において要約すること。（2）これらリカード的原理の歴史的起源を探求すること。これらの原理は経済科学そのものの成立、すなわち『具体的に世界的な』階級としてのブルジョアジーの発展に結びついているし、したがって、すでに、必然的規則性の諸法則、すなわち傾向の諸法則を孤立させて研究することができるほどに十分複雑な諸運動に『充ちた』世界市場の形成に結びついている。それらの諸法則は、自然主義的な意味や思弁的決定論の意味における法則ではなくて、『歴史主義的』意味における、すなわち『一定の市場』、あるいはむしろ、発展の諸運動のなかで内的連関をたもち有機的に生きている環境が生ずるかぎりにおける法則である（経済学は現象の量的な表現であるかぎりにおけるこれら傾向の諸法則を研究するが、経済学から一般歴史への移行においては、量の概念は質の概念および質となった弁証法的量の概念によって積分される）。（3）リカードをヘーゲルおよびロベスピエールと結びつける連関をあきらかにすること。（4）いかにして実践の哲学がこれら三つの生きた潮流の綜合によって新しい内在観、超越と神学とのあらゆる痕跡から浄められた内在観に到達したか。[22]」

以上のような、グラムシの問題意識には、きわめて独創的、天才的なひらめきがあるといってよいだろう。かれの

ヘーゲル観には、ベネデット・クローチェの影響が色濃くみられるようであるが、リカードーとヘーゲルがなにをもたらしたか、についての認識には、すでにマルクスの独自性についての予感がはらまれていて、もしかれが十分な条件に恵まれていたら、みのりおおい成果をあげたであろうと思わせる。しかしながら、かれはみずからのたてた問題を全面的に追求することができない拘禁の状態におかれ、ファシストの牢獄のうちで死なねばならなかった。こうした覚え書をとらえて、その構想をとやかくいうことは、かならずしも執筆者の思想の全体にたいする公正な評価にはいたらないであろう。だが、それを承知のうえで、あえていわねばならないことは、グラムシがマルクス主義哲学を、ヘーゲルとリカードーの業績の歴史主義－人間主義的な還元と翻訳だとみている点である。はたしてそうであろうか。マルクスがリカードーへの批判をおこなったとき、グラムシのいうような意味での、「一定の市場」概念を保持したのであろうか。マルクスの必然性の把握は、リカードーと同質の場におけるものだったといえるであろうか。

たしかに、「自己運動する一定の市場」とグラムシがいう表象が、経済科学の成立にさいして分析の前提となったということはできよう。だが、マルクスは、古典経済学がそこにもとづけば確実な法則がとらえられると想定した右の前提を、主語としての資本概念のもとに包摂させている。すなわち、リカードーにとっての第一の前提は、「制限なき競争」(Konkurrenz ohne Einschränkung) と工業による生産の増大という、観察可能な事実であった。たしかに、この自由競争と工業生産のもとで、「資本の諸法則が完全にあらわに自己を実現している」のであって、自由競争と工業生産とは、資本の内在的諸法則が現実化する生産関係と生産力的基礎を表象するものである。しかし、「もしそうであれば、それだけに、無制限な競争と工業生産 (die illimited (ママ) competition und (ママ) industrial production) とが、資本自体にとって、ますます生産せざるをえない自己の現実化の諸条件であるのは、いかにしてであるかをし

めすべきであろう（ここで必要なのは、たんに理論家の仮説としての仮説などではない。すなわち、理論家が、資本の、資本としての自己への関係のうちへ、外面的かつ恣意的に、つまり資本のそれ自体の発展としてではなく、ことがらを純粋に現出させるために想定された資本の諸前提として、自由競争と資本の生産的存立様式とをもちこむときの、かれの仮説としての仮説などではない）[23]。」

グラムシの弁護論にもかかわらず、リカードーの法則性、必然性、のとらえ方は、歴史的法則性、歴史的必然性の種差をもつものではなく、特定のイデオロギー的な世界観、人間観、このばあいホモ・エコノミクスの人間観と有機的にむすびついた抽象物、すなわち「一定の市場」概念によって設定された同質性の場へと還元されうるかぎりでの「傾向的な」（統計的な、といってもよい）規則性、法則性をさすものである。それは、むしろ自然法則、自然必然性へと帰着する論理的性質、すなわち、孤立化的抽象によって理想的近似として、法則と名づけられる機能連関なのである。もし、グラムシのいう「傾向の法則」というとらえ方が、社会科学における法則性の種差であるならば、それは、近代経済学の系譜、ミル、マーシャル、ケインズ、等々の源流としてリカードーが評価づけられるときの強調点とまったく一致するものであろう。すなわち、そのさいには、リカードにおける捨象の仕方、「強き事例をとる方法」が強調される。このようなリカードー評価は、リカードーが三階級三分配論として論ずる国民所有の相対的分前の変化率の追求――階級分配論的巨視的動態論――にたいしてあたえられるものであって、かれおよびかれにつづくマルクスの投下労働価値論にたいしてのものではないのである[24]。

またわれわれは、リカードーに認識論上の革新をみることはできない。「生活と歴史を思考し直観する仕方」におけるあたらしさをみることはできない。もし、そう認めるとすれば、そのあたらしさとは、経験論と形式論理学的演

釈の方法の社会科学への拡張と徹底にかほならない。したがって、実証主義的な計量化、モデル化の方法、行動主義的な社会理論の方法を、「革新」とよぶことになるであろう。グラムシが、「前提があたえられたとすれば」という仕方で表現している論理は、まさに内含関係（インプリケーション）を中心とした形式論理学の拡張を意味するのである。

さらにいまひとつつけくわえるならば、資本制的生産の構造を「社会的諸勢力の一定の関係」へと還元するのが、「歴史主義」であるのならば、マルクスはそのような「歴史主義」には立っていない。要するに、経験論的認識理論の徹底プラス歴史主義的還元というかたちでは、マルクスの真に革新的な部分にふれることはできないのである。なるほどマルクスは、つぎのようにのべている。

「（リカードーで重要なことは、A・スミスやセーでさえもが、まだ労働の一定の生産物を規制者（Regulator）としているのにたいして、かれはいたるところで、労働、活動、勤労（Industrie）そのものをとりあげ、生産物ではなくて、生産創造の行為をとりあげていることである。したがってブルジョア的産業の全時代をとりあげていることである。A・スミスでは、活動はまだ自然のきずなから、対象から、解放された、自由になった、分離されたものになっていないのである）（リカードーでは、人間はいたるところでかれ自身の生産力とかかわっているが、スミスでは、人間は、まだかれ自身の創造物のまえにひざまづいており、まだ、ある規定された、かれの活動の外部の状態が問題とされているのである。[25]）」

ここでマルクスは、生産過程およびその結果である生産物を、人間の活動の自己自身への関係としてとらえる視点が、社会科学の科学性を基礎づけることを示唆している。マルクスにおける認識論の構造の転換については、あとで

論じたいと思うので、ここではたち入らないが、すくなくとも、この視点がけっして人間の活動、労働の「現象学」を許すものではないことは、いっておかなければならない。人間の活動の、活動としての定在様式は、一定の構造をもつ「過程」のもとでのみとらえられる。活動のこの特定の過程を概念的に把握することができてはじめて、活動のそれ自身への関係について語ることができる。そして、人間の活動の原基形態である生産活動のうちの、労働過程について、『資本論』が論じている個所をのぞいてみれば、なるほど価値形成過程としては、「労働は絶えず不静止の形態から存在の形態に、運動の形態から対象性の形態に転換される。」[26] ここでは、生産物は、原料に「吸収された労働の計測器」[27] でしかなく、「労働過程にはいって行く諸商品も、もはや、合目的的に作用する労働力の機能的に規定された素材的な諸要因としては認められない。それらは、ただ対象化された労働の一定量として数えられるだけである」[28] ということになる。ここでは、一見、労働の現象学的還元の手法がおこなわれているかのようである。しかしながら、これにさきだつ「労働過程」論では、つぎのようにいわれる。

「生産物は、生産手段として新たな労働過程にはいることによって、生産物という性格を失うのである。それは、もはやただ生きている労働の対象的要因として機能するだけである。紡績工は、紡錘をただ自分が紡ぐための手段としてのみ取り扱い、亜麻をただ自分が紡ぐ対象としてのみ取り扱う。もちろん、紡績材料や紡錘なしでは紡ぐことはできない。だから、これらの生産物が現にあるということは、紡績が始まるときには前提されている。しかし、この過程そのものでは、亜麻や紡錘が過去の労働の生産物だということはどうでもよいのであって、それは、ちょうど、栄養という行為ではパンが農民や製粉業者や製パン業者などの過去の労働の生産物だということはどうでもよいようなものである、むしろ反対に、もし労働過程にある生産手段が過去の労働の生産物としての性質を感じさせるとすれ

ば、それはその欠陥のためである。切れないナイフや切れがちな糸などは、刃物屋のAとか蠟引工のEをまざまざと思い起こさせる。できのよい生産物では、その使用属性が過去の労働に媒介されているということは消え去っているのである。[29]」

右の労働過程と価値形成過程とは、たがいに還元しえない二重の過程として、全体としての商品の生産過程を構成している。労働そのものもまた、「一定のかたちに調教された自然力としての人間の緊張[30]」という側面と労働するものの自身の「肉体的および精神的諸力の自由な営み[31]」という側面、あるいは「いっさいの自然力を規制する活動[31]」という側面との統一である。この、それ自身、構造的な統一物としての労働が、どのような対象的諸条件と結合するか、によって、労働過程の示差的な諸様態が、歴史的に区別される。マルクスの歴史認識においては、人間性とか理性とか労働とかがえがく線型な法則的発展が、歴史的諸事象の背後ではたらくのではない。かれは、超個人的な主観としての「理性」の狡智について語ることはない。「経済的諸時代を区別する[32]」ものは、どのような労働手段が、どのように使用されているか、という指標である。つまり、対象的諸要因とそれの形態を変え、機能を制御する労働の潜勢力との特殊、具体的な結合様式が歴史的に発展するものと考えられている。ここでは、ヘーゲル的な歴史主義は完全にしりぞけられているし、リカードー的な還元主義もとられてはいない。

このようにみてくると、グラムシ的な「構造と上部構造の歴史的ブロック」論、この両者のあいだの「カタルシス」的関係という概念、かれのこのむ「有機性」の概念、などには、なお濃厚にヘーゲル主義的な、本質の連続的展開の論理がのこっているといえる。グラムシは、機械論的な法則観への批判から、弁証法的なそれをどのように積極的に把握するか、という課題ととり組んでいるのであって、さきにもふれたとおり、そこにはすぐれた予見がはらまれ

ている。しかし、かれがのこしたノートによるかぎり、かれはヘーゲル・プラス・リカードーの認識論的地平を越えでていない。すなわち、両者の折衷ではないマルクスの独自な論理へせまっていない。われわれの課題は、まさに、ヘーゲル・プラス・リカードーではないマルクスにおける科学と哲学の結合の独自な構造をとらえることでなければならない。

(1) 「『資本論』からマルクス主義哲学へ」、『思想』第五一五号（一九六七年五月号）所収。

(2) 邦訳『グラムシ選集』、山崎功監修、代久二編集、合同出版社、一九六一年、第二巻、三七ページ。

(3) 前掲『思想』論文参照。

(4) 「唯物論的歴史観の全体的構想について」、『思想』第五〇五号（一九六六年七月号）所収。

(5) 大井正著『現代哲学』、青木文庫、一五三ページから引用。

(6) 同書、一五二ページから引用。

(7) Lukács, G., Geschichte und Klassenbewußtsein, Berlin, 1923, S. 39 平井俊彦訳『ローザとマルクス主義』、ミネルヴァ書房、六二ページ。ただし訳文は変えている。以下おなじ。

(8)と(9) Ebenda. 同、六二ページ。

(10) Ebenda. 同、六二―六三ページ。

(11)と(12) 前掲『グラムシ選集』第二巻、三七ページ。

(13) 同選集、第四巻、三四一ページ。

(14) 同選集、第二巻、一九八ページ。

(15) 同書、五〇ページ。

(16) 同選集、第四巻、二九一ページ。

(17)(18)(19)(20) 同選集、第二巻、五一ページ。

(21) 同書、五三ページ。別の個所でグラムシは、「自己運動」というのは、自由と対立するものではなくて恣意と対立するものであり、自己運動はむしろ「集団の自由」にあたるとのべたあとでつぎのようにいっている。「リカードーが、「これこれの条件を仮定すれば」経済にこれこれの結果が生じるだろう、というとき、かれは経済を「決定論ふう」にあつかったのでもないし、またかれの考えかたが「自然主義的」であったということにもならない。かれは、確信にもとづいて（自由に）なんらかの目的の見地からとらえられたなんらかの原理があり、この原理にしたがって作用する社会集団の堅固で団結した活動があれば、自己運動とよばれうる発展が生じ、

この発展は、精密科学の方法で認識され抽出されうる諸法則の表現としてとらえられる、ということを観察したのである。」(同選集、第二巻、三〇三ページ)。

(22) 同書、三七—三八ページ。

(23) Marx, K., Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Rohentwurf, 1857-1857, Berlin, 1953, S. 454. 邦訳『経済学批判要綱』、高木幸二郎監訳、第三分冊、四九五ページ。ただし訳文は変えている。以下おなじ。

(24) 内田義彦他編『経済学史講座I、経済学史の基礎』所収、真実一男「リカードウ『経済学及び課税の原理』」第Ⅳ節、二五五ページ参照。

(25) Marx, K., Grundrisse, S. 808, 邦訳前掲書、第四分冊、九一〇ページ。

(26) Marx, K., Das Kaptal, Dietz, 1960, Bd. 1, S. 197, 邦訳マルクス・エンゲルス全集、第二三a巻、三四八ページで引用。以下おなじ。

(27) ibid., S. 198, 同書、二四九ページ。

(28) ibid., S. 204 同書、二五六ページ。

(29) ibid., S. 191, 同書、二四〇ページ。

(30) Grundrisse, S. 505, 前掲書、第三分冊、五五五ページ。

(31) Das Kapital, Bd1, S. 186, 前掲書、二三四ページ。

(32) ibid., S. 188, 同書、二三六ページ。

二、現実性、諸個人、歴史

ここでわたくしは、マルクスの一八五〇年代以降の経済学研究のうちにみられる弁証法の問題を検討するにさきだって、そこにいたるマルクスの思想のあゆみの若干の特徴を概観してみたいと思う。もとより、一八四八年の『共産党宣言』にいたるマルクスの思想形成史は、それじたいが大きな研究課題であり、論争のつづいている舞台であるが、ここでは唯物論的歴史観確立の指標とされている『ドイツ・イデオロギー』第一章を分水嶺に、ヘーゲルおよびフォイエルバッハからマルクスを区別する思想と方法に問題をかぎりたい。

『ドイツ・イデオロギー』第一章では、なるほどドイツのイデオロギー的状況へのたちいった批判にさきだって、

イデオロギー一般にたいする批判の方法が言及され、そのさい「諸観念、諸表象の生産、意識の生産」を「人間の物質的活動と物質的交通という現実的生活の言語のうちへあみこまれている」[1]ものとしてとらえる観点がうちだされ、その角度から唯物論的歴史観へと叙述がすすんでゆく（この編成は、再編集版（一九六五）による）。

マルクスがここでとくに考慮をはらっている点は、理論の出発点となる「前提」はなにか、という点である。ヘーゲル主義が、学問の真の方法として要求するのは、それ自身の外部に「前提」をもたないものからはじめる、ということであった。ヘーゲル論理学――それは諸科学百科の基礎的原理の学とみなされている――における「端緒」の特別な意義は、その「無前提」的端緒をいかに定立するかにあった。ヘーゲルにとって「現実性」とは、客観の諸カテゴリーの展開をまってはじめて概念化しうる複雑な諸規定の総体であった。このようなヘーゲル哲学およびそれに追従するヘーゲル主義者たちにたいするマルクスの見地は、ヘーゲルを頂点とするところのドイツの理論のよってたつ地盤、その諸前提――それはじつは無前提であることを自負し、誇示するものであるが――の外へでること、その無前提としての前提を問題とし、吟味することであった。さしあたってこの課題に手をつけたのはフォイエルバッハであった。マルクスは「聖マックス」の章でこの間の事情をつぎのようにのべている。

「フォイエルバッハが宗教的世界を、彼自身のもとではまだ言葉だけでしか登場してこない地上的世界の幻想だと指摘したことによって、おのずからドイツの理論には彼が答えなかったつぎの問いが生ずることになった。すなわち、人々はこうした幻想をどうやって自分の『頭のなかに入れた』のか？　この問いは、ドイツの理論家たちにさえ、唯物論的な世界観、無前提的ではなくて、現実的で物質的な諸前提そのものを経験的に観察する、それゆえはじめて現実的に批判的な世界観への道をひらくことになった。この進路はすでに『独仏年誌』上で、『ヘーゲル法哲学批判序

説』および『ユダヤ人問題によせて』のなかで示唆されていた。だがこれは当時まだ哲学的な言いまわしでおこなわれたので、ここに伝統的ににじみ出てくる「人間的本質」とか「類」とか等々の哲学的表現が、ドイツの理論家たちにかれらが現実的発展を誤解し、ここでもまた問題はただかれらの着古した理論的上衣をあらたに裏返すことだと信じるのにつごうのよいきっかけをあたえていた。(2)」

かれはいまやフォイエルバッハをもふくめてドイツ的理論そのものの前提を問題とするところへすすみでている。その前提をかれは「現実的（wirklich）」という規定で提示する。ヘーゲルが「現実性」を思弁によって媒介されたもっとも純粋な本質、絶対的必然性として定立したのにたいして、マルクスは「現実的諸前提」として、人間たちをそのものたらしめた眼のまえにある生活諸条件、あたえられた社会的連関から出発すべきことを主張する。それは「純経験的な方法で確かめうる(3)」前提であり、したがって人間は、もはや抽象的な「人間なるもの」としてではなくて「現実に（*wirklich*）あるがままの姿、すなわち勤労し（wirken）、物質的に生産する諸個人、それゆえ一定の物質的な、そしてかれらの思うとおりにはならない諸制限、諸前提、諸条件のもとで活動している姿での諸個人(4)」として考察される。

このような現実的諸個人についてのなんらかの理論的考察は、必然的に「歴史」的考察となる。この見方は、各個人と各世代があるあたえられたものとしてみいだす「生産諸力、諸資本および社会的交通諸形態の総和(5)」を実在的根拠として、哲学者たちが「実体」とか「人間の本質」とかと表象してきたものをとらえる見方なのであるから、理論的考察は歴史的にたどられうる連関以外のいかなる連関をも前提することはないことになる。

いまや転換はあきらかである。『経済学・哲学手稿』や『ミル評注』（一八四四）にみられるところの、人間の「類

的本質」を前提とするフォイエルバッハによるヘーゲル批判の抽象性が止揚され、マルクス自身の以後の理論的考察方法がはっきりと定立されている。すなわち、その出発点となるものはあたえられた物質的生活諸条件（生産諸力、諸資本、社会的交通諸形態など）の総和のもとにある現実的諸個人とその活動である。彼は、諸個人の背後に、人間一般の理念（＝類的本質）を絶粋に洞察するヘーゲル主義的な哲学とはきっぱりと絶縁している。マルクスの場合、理論的考察がそこでおこなわれる世界、また理論的考察をさしむけるべき対象は、所与としての歴史的に特定的＝現実的な連関であり、人間的諸個人もまた、それら連関の一定の機能のにないてとして位置づけられるような、構造をもった全体である。この理論的対象の特質が、マルクスの以後の研究の方向を規定したといえよう。

『ドイツ・イデオロギー』にさきだつマルクスの思想のあゆみをみることはここでの問題ではないが、マルクスの論理のヘーゲル主義の論理からの質的な差異にかんして細見英氏の研究「ヘーゲル市民社会論とマルクス」[6]の論述を援用しておこう。細見氏は『ヘーゲル国法論批判』について検討をくわえ、一般に信じられているヘーゲルの概念的論理における必然的構成という仮象が、市民社会論ではいかにその外見を裏切っているかを指摘する。すなわち、ヘーゲルの市民社会論は、イギリス社会における現象的事態の実証主義的描写にとどまっていて、その事態を市民社会に内在する「本質的矛盾」の必然的な現象形態としてはとらえていない。ヘーゲルは、市民社会が一方の極に富の蓄積、他の極にはそれに奉仕する労働者階級の貧困の増大をうみだすことをたんに指摘するにすぎない。それら諸現象は、ヘーゲルにあっては、真の意味で「概念的に把握されていない」[7]のである。ヘーゲルにおける国家社会の諸事象の概念的把握――それが『法哲学』の主題なのであるが――は、マルクスにおけるように、「固有の対象の固有の論理を把握する」[8]ところに成立するものではなく、論理的概念の自己運動の形態で「あらかじめ前提されている」[9]もの

の適用であった。「したがって、と細見氏はいう、ヘーゲルにおける『概念的把握』とは、実在的諸対象を現象するがままにとりあげて、これらを論理的概念の諸契機とそれらの相互的媒介運動としての概念の自己展開に対応させて編成叙述することにほかならない。それゆえ『法哲学』の論述は、実在的諸事象にかんするかぎり、現象的事態の実証主義的描写にとどまるものである。[10]」

論理だけが現実の事態からきりはなされてあらかじめ前提される、これが「無前提的な」ドイツの理論が現実に接する仕方であった。両者は内的、必然的な関係をもたない。「一定の抽象的な概念規定にたいしては、複数の実在的現象を類推的に対応させることが可能[11]」なのである。質的に多様なもののあいだをアナロギーによって同心円的に結合する論理、それはきわめてドイツ的な有機体観に根ざす論理である。すなわち同一の中心を共有する諸円の円が論理的概念の自己展開をなし、諸円は表象（イデオロギー）によって論理的概念の円へと媒介される。したがって実在的な現象の体系的編成にあたっては、現象のあるべき表象（理念）が前提され、それにもとづいて多様な実在的現象に一定の価値判断がくわえられる。そしてそのうえで、諸現象は概念の展開のおのずからのあゆみを演ずるようあらかじめ役をふられるのである。すなわち「おなじく実証主義的に描写されている個々の現象的諸事象にしても、ある事象は概念のまったき定有として肯定的な意義を付与され、他の事象は概念に外的な定有としての、したがって体系的には止揚さるべき偶然的な定有としての意義を与えられているのである。[12]」このヘーゲル弁証法の秘密を捕捉するのに、その全体系のうちでもっとも好適な場は、『法哲学』をおいてないであろう。マルクスの『国法論批判』は、その意味で、問題性そのものにおいて、批判の的のさだめかたにおいて、ヘーゲルを跳躍台として質的にことなった次元へと越えでる条件をうちに秘めたものであった。細見氏はこうしたマルクスの視点を、「ヘーゲル国家論の合理

的内実の批判的検討」[13]というかたちでとらえだしている。氏によれば、マルクスの追求したその合理的内実とは「哲学的意義づけと体系的編成をこうむる以前の、ヘーゲルによって直観されたかぎりでの近代国家・社会の状況とその問題性、実証主義的に反映されているかぎりでの近代的諸現象とそこにおける矛盾」[14]であった。

この指摘は、ヘーゲルとマルクスの理論的問題性の差異についての示唆に富む。すなわち、マルクスはヘーゲルの哲学的体系の論理に主要な注意をあつめるのではなく、そこに表象されている現実の事態をあらためて自己の問題としてとりあげている。ヘーゲルにとって、それ自体はなんら問題ではなく、むしろ自己の思弁のための素材的契機であったものを問題としてとりだし、ヘーゲルにとってまさに問題であったものをイデオロギー的な外皮としてしりぞけているのである。細見氏はさらに、この論文のなかで、マルクスがヘーゲルのいう「概念的把握」の方法を継承、徹底しようとしていることをのべているが、この点にかんして注意を集中し、両者における「概念的把握」のちがいを検討することが、われわれの課題である。

(1) Marx, K., Deutsche Ideologie, Werk 3, S. 26 拙訳『新版ドイツ・イデオロギー』(合同新書)、四〇ページ。

(2) ibid, S. 217-218, 邦訳マルクス・エンゲルス全集第三巻、二三六—二三七ページ。ただし訳文は一部変えている。

(3) ibid, S. 20, 前掲拙訳、三〇ページ。

(4) ibid, S. 25, 同書、四〇ページ。

(5) ibid, S. 38, 同書、八三ページ。

(6) 細見英「ヘーゲル市民社会論とマルクス」、『立命館経済学』、第一一巻、第一・第二合併号所収。

(7) 同誌、一九一ページ。

(8) 『ヘーゲル国法論批判』Marx/Engels, Werke 1, S. 296

(9) 『立命館経済学』、第一一巻、一九一ページ。

(10) 同誌、一九一ページ。

(11) 同誌、一九二ページ。

マルクス自身が、『国法論批判』のなかで、ヘーゲルの身分制国会論を検討してこうのべている。「ここでは、同一の「実在的

な」主語が、さまざまな意義においてとらえられている。しかしその意義は、自己規定ではなく、比喩的な、すりかえられた規定なのである。同一の意義に他の具体的な主語を、また同一の主語にたいして他の意義をあたえることができよう」(Werke, 1, S. 287, 邦訳全集第一巻、三二四ページ)。

(12) 前掲誌、一九二ページ。

(13) 同誌、一九五ページ。

(14) 同誌、一九五―一九六ページ。

三、方法の問題

――「経済学批判序説」を中心に――

マルクスは、自己の理論的作業を、ブルジョア社会の「解剖学」(『経済学批判』序言)とか、「生理学」(『剰余価値学説史』第二巻)にあたるものとみなしている。これはたんなる比喩ではなく、方法上の特徴に関連している。すなわち、「有機的体制」の内部編成を諸概念の網でとらえる方法とむすびついている。マルクス以後、経済学や社会学は、有機体を編制する諸概念をしばしば利用する。たとえば、「細胞」、「組織」、「代謝」、「肢節」、「成長」、「循環」等々。マルクスにかぎれば、「筋骨」とか「脈管」とかという概念も利用されている。これらはたんに比喩的な表現としてもちいられているのであろうか。モデル論的な説明手段としてもちいられているのであろうか。もちろん、社会有機体説のような仕方でのアナロギーの論理が、理論のほねぐみを形成しているばあいは、そうであろう。あるいは、実証主義的な構造―機能の論理のばあいも、そういえるであろう。ここにその実例となる最新の発言があるので引いておこう。

「一般に、社会科学における構造的な諸範疇は、すべて、ほんらい視覚化してあらわしたいという人間の思考様式

の表明にほかならない。構造という概念的表示それ自体が、……『空間表象から借りてきた』比喩なのである。人間の社会生活に関して構造という語が比喩でなく使われうるのは、せいぜい、人間の地球上における分布をあらわす生態学（人間生態学）の分野だけである。こうして、比喩的表現による思考法は、社会科学者にとって、かれらが日常自覚しているよりもはるかに広汎かつ本来的、その意味でまた不可欠なものである、社会学と経済学には、比喩的な中心概念はとりわけ多い。われわれがこれまで用いてきた、成長・循環・構造・機能・変動などという諸概念はすべてこれに該当する。

……経験科学の素材は、最終的には、実在についてのわれわれの感覚的与件である。われわれはその感覚的与件から、成長・循環・構造・機能・変動などの、比喩による思考の産物たる抽象概念を構成（construct）しているのである。[1]」

この新進の社会学者は、概念の形成にかんして経験論的なノミナリズムの立場に立っている。つまり、感覚的与件である個別的なもののみが実在性の名にあたいするものであって、視覚をのがれる抽象的な諸概念は、名目的な集合名詞とかんがえられている。ここでは、科学的認識の歴史的な発展というものは、すこしもかえりみられていない。科学的認識の歴史は、実在的な対象にかんする諸定義の交代と深化によってたどられるものであって、そのいみでは、「構造」という概念自体が、種々の諸定義を経過してきているのであり、それをかえりみずに、それを空間的表象からの比喩のところまで、いっきょにひきもどすのは、抽象的言語表現についての便宜主義と感覚的記述言語についての素朴模写論のイデオロギーを前提することになるだろう。もしも、抽象的諸概念が比喩的思考によってもちいられる便宜的な道具にすぎないのであれば、対象の定義の変化にあらわれる認識の深化につれて、ある名辞、たとえば

「構造」という名辞がおかれる連関およびその位置におかれるがゆえに負わせられる機能といったものは、すべて比喩という主観の側のできごととして処理されることになるだろう。

抽象的言語表現はすべて、感覚的記述言語が個別的な指示対象をもつようには、対象を指示しない。だからといって感覚的記述言語の確実性に依存するのは、暗に、感覚的記述言語が実在そのものに埋めこみになっていて、直接無媒介に実在性を指示しうるという考え方をしのびこませることであろう。しかしながら、抽象的諸概念は、それが一定の編制されたかたちをとるならば、具体的な、複雑な対象の内部編成と発展のメカニズムを表出しうるものである。われわれは、以下で、マルクスにとっての「方法叙説」といってよい『経済学批判序説』を手がかりに、マルクスの認識論的特質をしめし、あわせて右のような最新（？）の科学主義の認識論の誤謬をもあきらかにしたいとおもう。

『経済学批判序説』は、（1）生産、（2）分配・交換・消費にたいする生産の一般的関係、（3）経済学の方法、（4）生産生産、手段と生産関係、生産関係と交易関係、生産関係と交易関係とにたいする関係での国家形態と意識形態、法律関係、家族関係、の四つの節にわけられている。(2)

かれは、第三節「経済学の方法」で、有名な下向―上向の方法をふくむみずからの「真に科学的」な方法について論じている。この点をまずとりあげよう。

「われわれがあたえられたひとつの国を経済学的に考察するばあい、われわれは、その国の人口、その人口の諸階級、都市、農村、海洋、さまざまな生産部門への配分、輸出入、年々の生産と消費、商品価格等々からはじめる。実在的で具体的なものから、現実的な前提から、したがって、たとえば経済学では、社会的生産行為全体の基礎で

あり主体である人口からはじめることが、ただしいように思われる。しかし、もっとたちいって考察すると、これはまちがいとわかる。[3]」

前節でのべたように、マルクスは、『ドイツ・イデオロギー』では、ヘーゲルの「無前提的」な学の方法原理をイデオロギー的なものとしてしりぞけ、「物質的」で、「経験的にたしかめうる」、あるがままの現実的前提のもとで、諸個人の活動をとらえる視点を強調していた。しかしながら、諸個人を現実的諸関係のうちで、歴史的にとらえるという視点は、それだけでは、科学的真理へいたる客観的ではあるがなお、一般的—抽象的可能性をあたえるにすぎない。その意味では不十分なものであった。『ドイツ・イデオロギー』でも、たしかに、この『序説』と同様に、人間と動物との区別を、生活手段の生産によっておこない、生産の様式と生産されるものとによって諸個人の示差的な定在様式をとらえる視点がしめされている。そして、「この生産は、人口の増加によってはじめて出現する。人口の増加はそれ自身また諸個人相互のあいだの交通（Verkehr）を前提している。この交通の形態は、こんどは生産によって規定されている[4]」というように、生産——人口——交通——生産のサイクルが提示されている。

だが、『ドイツ・イデオロギー』とこの『序説』の叙述とを比較してみると、前者では、生産とその他の諸要素とが、相互作用の関係におかれ、生産の歴史貫通的根源性が主張され、生産の歴史的発展は、自然成長的分業——社会的分業——分業の廃止、という諸個人の活動様式の転態としてとらえられている。それにたいして後者では、分析の対象が「ブルジョア社会の内的編制」の理解に、明確な方法的意識をもって限定されている。「人間の解剖は、猿の解剖のための一つの鍵[5]」といわれ、「ブルジョア社会は古代その他の経済への鍵を提供する[6]」といわれている。こうした限定は、以前のみずからの歴史的還元の方法への一定の自己批判をふくんでいるとみてよいであろう。その意味

で、実在的—具体的なもの、「純経験的な方法で観察される」(『ドイツ・イデオロギー』)前提である「人口」の分析から出発する方法がしりぞけられているとみることができる。この方法がしりぞけられていることの内含的な意味は、つぎの点にある。すなわち、この方法によれば、生産する諸個人の総和としての人口が、社会的生産行為全体の主体であるから、それをまず一方の側において、人口の年令別とか階層別、地域別、部門別の分布をしらべる。そして他方の側で、それらの人口が生産し消費する諸財貨の種類と量、輸出入、商品価格等々、すなわち客体的諸要因をしらべ、両者をくみあわせて、国民所有や人口一人あたりの生産性等の指標をえ、各国別の比較によって類型をとるという過程で、研究がすすむことになるだろう。今日流行の「近代化」論の方法は、このようなものである。この方法では、生産主体と生産の客体的諸条件とが、はじめから相互独立に対置され、両者の相関の経験的・感覚的記述のつみかさねによって認識をふかめようとする経験論の認識論が問題のたてかたを決定している。つまり、認識とは、あたえられた主体が、あたえられた経験的素材としての客体をいかに記述するか、ということだと信じられているのである。ここでは、なるほど抽象的概念は比喩であり、理論なるものは、主観の構成作用としての理想化、モデル化の手段による現象整理となるだろう。

「もし人口からはじめるとしても」、とマルクスはいう。それはさしあたって、「全体についてのひとつの混沌とした表象」であるかぎりのものとみなされなければならない。[7] つまり、生産と消費の現実的な主体としての意味を、そこにはじめからなげいれてはならない。たとえば、セーは、一国民を全体としてとって、「その生産はその消費である」といったみかたをする。それにたいして、マルクスはいう。「社会をひとつの単一な主体としてみるのは、社会をまちがって、すなわち思弁的にみる」[8]ヘーゲル主義的なみかたである。そのようなみかたをしりぞけるかぎり、

「人口」の概念は、一国の社会全体をさすもの以上のなにものでもなく、それをもっとくわしく規定してゆけば、資本、賃労働、交換、分業、貨幣、価格、価値といったより単純な概念がとりだされ、ついには「もっとも単純な諸規定」に到達する。この分析は、人口が農業人口、工業人口、等へ、生産物がおなじく農業生産物、工業生産物等々へ分解されてゆくのとはまったくことなる分析である。このすすみゆきを、マルクスは「表象された具体的なものから、だんだん稀薄になる抽象的なもの（immer dünnere abstrakta）へ」[9]とし、「充実した表象が抽象的規定へ蒸発させられ」[10]るのだ、という。

ここでは、主体と客体あるいは主観と客観とが相互に独立に諸要素に分解され、それら諸要素の結合の一定の仮説が設定され、その仮説にもとづいて説明理論がくみたてられるという分析―綜合とはことなる分析のしかたがはたらいている。この点についての指摘は従来あまりみられなかったようにおもう。わたくしの眼にふれえたかぎりでは、鈴木鴻一郎編著『経済学原理論（上）』が、その区別に着目している。そして経験論的な分析―綜合と区別される分析のしかたを、「具体物を単一の規定に」[11]、「分化し展開していくような一般的な規定性に還元する」[12]しかたとしてとらえている。鈴木氏のばあいは、マルクス自身においてこの区別があいまいであるという認識がそれにともなわれ、ヘーゲル論理学の概念の自己運動の論理を、それを許す特定の歴史的形成体――資本制的な商品生産社会――の自己運動という現実的根拠によって媒介し、「幻想」からすくいだすという道をとる。すなわち、マルクスがここでおこなっている「具体的なもの自身の成立過程」と「具体的なものをわがものとし、それをひとつの精神的に具体的なものとして再生産するための、思考にとっての仕方」との区別を、マルクスにおける自然科学的方法と社会科学的方法との差異の理解のいたらなさとして批判する。[13]そして、たとえ観念をそのまま実体と誤認したにせよ、「歴史的形成

を対象とし、したがってその体系がそういう対象それ自身の自己形成の叙述で」[14]あるような、「いいかえれば、対象それ自身の自己形成過程を叙述するだけで、これになんら恣意的操作を加えない」[15]、ヘーゲルの体系構成の方法を経済学に固有な方法として復権させようとする。わたくしは、この見解には同意できない。

マルクスは、ひとつの総体――表象における具体的なものであるが、それ自身においてはまだ混沌とした、すなわち未分化という意味で、観念的、抽象的な総体――を、それを編制する諸肢節（die Glieder）に分解し、「ひとつの統一の内部の差異」[16]を概念的にあきらかにすることを、分析の第一の段階とみている。すなわち、いわゆる「下向」的分析である。この分析はかならずしも一定の歴史的時代に属する契機へ達しておわるのではなく、歴史貫通的な諸契機へまで下降するものである。なぜなら、総体の表象は、それが表象であるかぎり、「人口」の概念でしめされようと、「社会」の概念でしめされようと、「このもの」（特殊性）としての制約をまぬかれえないものであって、分析は、そこから、それのもつ一般的内容をとりだし、概念として定立しなければならない、すなわち、特殊としての総体を、それを構成する一般的なものとしての諸概念の定義――それはついには「もっとも単純な諸規定」にゆきつく――へと分解しなければならないからである。そして、特殊的な総体を、それを構成する一般的な概念へと分析することとは、ひとつの体系にとって「素」なるものをとりだすことであるが、同時にそれは、どんな体系にとってもある共通なものでもある（マルクスの「生産一般」についての考察をみよ）。しかし、その一般性が、真の意味の一般性、すなわち特殊と個別との必然的根拠であることを獲得するのは、それが「体系素」としての形態を失なわないことによってであろう。このような、特殊を前提し、特殊の自己否定的根拠として、特殊によって媒介されたものであって、たんなる即自的な一般性から区別された一般性としての「素」なるものを抽出する分析を、示差的（different-

ial) 分析とよぶことができるであろう。つぎに、マルクスが「真に科学的」と称する「抽象的なものから具体的なものへ」の「上向」の道では、たえず具体的素材の分析をともないながら、言語学でいうコードとしての役割に類比できる役割をになう諸概念を用いて、単純で強い相互作用から、複雑で弱い相互作用への複合的編制がたどられる。単純で強い相互作用というのは、他の全部の関係に「順位と影響」[17]とをあたえる「ひとつの一般的照明」[18]、ひとつの特殊なエーテルであって、そのうちにあらわれるすべての定在の比重を決定する」[19]（傍点、引用者）ような支配的、包摂的な関係を意味し、複雑で弱い相互作用というのは、その照明のもとで、派生的に「順位」、「比重」が決定されるような関係のことである。この「上向」過程は、カテゴリーの確定を意味する形態論的次元、それの相互作用が問題となる構造論的次元をへて、全体を総括する体系論的次元へとたどられ、最初、商品の特殊な形態としてとらえられた「資本」が、資本制という体系の概念として最後に登場するようなラセン的上昇をたどるものである。これは総体化的(integral)編制とよんでもよいかと思われる。この方法は、一定の系の構造的編制とその運動の機構とを概念的にわがものにする原理としての、認識における「生産」の原理とでもいうべきものを根底においている。わたくしは、次の機会にこの原理を論じてみようとおもう。

(1) 富永健一『社会変動の理論』、岩波書店、一九六五年、二四〇ページ。

(2) 「序説」は、Mのサインがあって、八五七年八月二三日にはじまり、九月の中旬ごろその手をはなれた一冊のノートに書かれており、当前かれが計画していた経済学批判の労作全体に付すべき「一般的序説」の未完の草稿である。この序説につづいて、かれは七冊のノートに、現在『経済学批判要綱（草案）』として公刊されている内容を書きつけている。以下の引用は、『要綱』の冒頭に収録されているものに依る。

(3) Marx, K., Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Berlin, 1963. S. 21 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』第一分冊、二一—二二ページ。

(4) 拙訳『新版ドイツ・イデオロギー』、三一ページ。

(5)と(6) Grundrisse, S. 26『要綱』第一分冊、二七ページ。

(7) ibid. S. 21. 同書、一二一ページ。
(8) ibid. S. 15. 同書、一六ページ。
(9)と(10) ibid. S. 21, S. 22. 同書、一二一ページ。
(11)と(12) 鈴木鴻一郎編『経済学原理論（上）』、一一、一〇ページ。
(13) 同書、一一一ページ。
(14)と(15) 同書、一三―一四ページ。
(16) Grundrisse, S. 20, 前掲訳書、一一一ページ。
(17)(18)(19) ibid. S. 27, 同書、一八―一九ページ。